

阿部吉雄、山本敏夫著「老子」新釈漢文大系、明治書院 1966 年 10 月 30 日刊を読む

顕質第八十一

1. <題意>

- (1) この章は、表面を飾るものに対する攻撃がさまざまな表現で綴られ、道を体した聖人は真実を尽くし、他と争わぬものである旨が説かれている。
- (2) 「顕質」とは「質朴にして真実なるものを顕賞する」という意味であろう。章旨にかなっていると思う。

2. <書き下し文>

- (1) 信言^{しんげん}は美^びならず、美言^{びげん}は信^{しん}ならず。
- (2) 善者^{ぜんしや}は辯^{べん}ぜず、
- (3) 辯^{べん}ずる者^{もの}は善^よからず。
- (4) 知者^{ちしや}は博^{ひろ}からず、
- (5) 博^{ひろ}き者^{もの}は知^しらず。
- (6) 聖人^{せいじん}は積^つまず。
- (7) 既^{ことごと}く以^{もつ}て人^{ひと}の爲^{ため}にして、己^{おのれ}愈^{いよいよ}有^{いう}す。
- (8) 既^{ことごと}く以^{もつ}て人^{ひと}に與^{あた}へて、己^{おのれ}愈^{いよいよ}多^{おほ}し。
- (9) 天^{てん}の道^{みち}は、利^がして害^{がい}せず。聖人^{せいじん}の道^{みち}は、爲^なして争^{あらそ}はず。

3. <通釈>

- (1) 真実の言葉は美しく飾られてはいない。美しく飾られた言葉には真実がない。
- (2) 真に善き行ないをなす者は多弁を弄さない。
- (3) 多弁を弄する者は、実は善行をしていない者である。
- (4) 真に良く知っている者は、博識者ではない。
- (5) 雑多な知識を博く持っている者は、実はどれ一つとても真に良く知ってはいない。(真に尊いものは真実と謙虚さである。)
- (6) 聖人は自分のために蓄積しない。
- (7) ことごとく人々のために尽くす。かくも真実を尽くす故に、人々から感謝され、かえって自分がいよいよ多く所有するようになる。
- (8) 聖人は自分のものをことごとく人に与える。その結果は、前と同様、かえって自分がいよいよ多く持つようになる。
- (9) 天の道は万物を利するのみで害することがない。同様に、聖人の道はすべての人々のためにし、しかもその功名を人と争おうとしない。(それだからこそ、能く大事業を遂行し得て、天下の王となれるのである。)

4. <語釈>

- (1) 既以為人 すべてその力を人々のために尽くす。
- (2) 「既」は広雅釈詁一に「既は尽なり」とある。ことごとくの意。
- (3) 「以」は聖人の力をもってである。

[コメント]

論語と並び 2000 年以上学び継がれた中国の古典中の古典、老子の最終章、「顕質」。「質朴にして真実なるものを顕賞する」、この「顕質」の章も現代にあって説得力がある。ここ数週間、岩波文庫版と明治書院の新釈漢文大系の 2 冊で「老子」を折に触れ読んできた。この阿部吉雄、山本敏夫両先生の明治書院 新釈漢文大系「老子」も極めて丁寧でわかりやすく有難かった。明治書院 新釈漢文大系では「老子」は 130 ページなので、是非、お気軽に書き下し文と通釈、語釈だけでも一度ご通読を。

— 2013 年 2 月 12 日 林 明夫記 —